

# メモ (整数論)

hos

2019 年 9 月 12 日

$\div$  は整数除算 (剰余の符号を被除数に合わせる).

## 1 mod 逆元 (2 冪)

奇数  $a$  に対し,  $a \times (3a \text{ xor } 2) \equiv 1 \pmod{2^5}$  (黒魔術).

$ab \equiv 1 \pmod{2^k}$  のとき,  $a \times b(2 - ab) \equiv 1 \pmod{2^{2k}}$  ( $1 - ab(2 - ab) = (1 - ab)^2$  より).

$ab \equiv -1 \pmod{2^k}$  のとき,  $a \times b(2 + ab) \equiv -1 \pmod{2^{2k}}$  ( $1 + ab(2 + ab) = (1 + ab)^2$  より).

## 2 mod 逆元 (一般)

$(r_0, s_0, t_0) = (a, 1, 0)$ ,  $(r_1, s_1, t_1) = (b, 0, 1)$ ,  $(r_i, s_i, t_i) = (r_{i-2}, s_{i-2}, t_{i-2}) - (r_{i-2} \div r_{i-1})(r_{i-1}, s_{i-1}, t_{i-1})$  とすると,  $r_i = as_i + bt_i$ ,  $\gcd(s_i, t_i) = 1$  が不変.  $r_k = 0$  になったとき,  $|r_{k-1}| = \gcd(a, b)$  なので, 特に  $as_{i-1} \equiv \pm 1 \pmod{b}$ .

$k \geq 3$  なら,  $|s_2| < |s_3| < \dots < |s_{k-1}| < |s_k| = \frac{|b|}{\gcd(a, b)}$ ,  $|t_2| < |t_3| < \dots < |t_{k-1}| < |t_k| = \frac{|a|}{\gcd(a, b)}$ .

## 3 mod 平方根 (素数)

$p$  を奇素数とする. 平方剰余  $a \in \mathbb{F}_p^\times$  に対し,  $b^2 - a$  が平方非剰余となる  $b \in \mathbb{F}_p$  は  $\frac{p-1}{2}$  個ある ( $b^2 - a = c^2$  の解は  $(b+c)(b-c) = a$  より  $(b, c) = \left(\frac{t+at^{-1}}{2}, \frac{t-at^{-1}}{2}\right)$  と書ける  $p-1$  個で,  $c$  を  $-c$  にしても同じ  $b$  が対応して,  $c=0$  は解でない). よってそのような  $b$  は期待値約 2 回の乱択で見つかる.

2 次拡大  $\mathbb{F}_p(\sqrt{b^2-a})$  を考えて,  $x = (b + \sqrt{b^2-a})^{\frac{p+1}{2}}$  とすると, Frobenius 準同型の性質より  $x^2 = (b + \sqrt{b^2-a})(b + \sqrt{b^2-a})^p = (b + \sqrt{b^2-a})(b - \sqrt{b^2-a}) = a$  となる.  $x^2 = a$  の解は  $\mathbb{F}_p(\sqrt{b^2-a})$  においても 2 個しかない,  $x \in \mathbb{F}_p$  である.

## 4 有限体上の多項式の因数分解

$p$  を素数,  $q = p^e$  とする. 以下の 3 ステップを行う.

### 4.1 square-free factorization

$f \in \mathbb{F}_q[T]$  を  $f = f_1^1 f_2^2 \dots$  ( $f_i$  は square-free) の形にする.

$\gcd(f, f') = \prod_{p \nmid i} f_i^{i-1} \prod_{p \mid i} f_i^i$  なので、除算と gcd で  $f_1$  から順に  $f_i$  ( $p \nmid i$ ) が求まる。残りは  $p$  乗根をとって (指数を  $p$  で割って係数に Frobenius 準同型の逆をかける) 再帰的に処理。

## 4.2 distinct-degree factorization

$f \in \mathbb{F}_q[T]$  を  $f = f_1 f_2 \cdots$  ( $f_j$  は  $j$  次既約多項式の積) の形にする。

$T^{q^j} - T$  は  $\mathbb{F}_q$  上の次数が  $j$  の約数の既約多項式すべての積である ( $T^{q^j} - T$  は微分が  $-1$  なので square-free)。最小分解体は  $\mathbb{F}_{q^j}$  で、部分拡大は  $\mathbb{F}_{q^{(j \text{ の約数})}}$ 。よって  $T^{q^j} - T$  ( $j = 1, 2, \dots$ ) との gcd をとって割っていけば  $f_1$  から順に求まる。

$\gcd((f \text{ の約数}), T^{q^j} - T)$  を求めるために、 $(T^{q^j} - T) \bmod f$  を計算する。 $\mathbb{F}_q[T]/(f)$  を  $\deg f$  次線型空間とみて、 $q$  乗は線型写像なので先に行列を求めておけば、 $O((\deg f)^2 \log q + (\deg f)^3)$  回の計算でできる。

## 4.3 Cantor–Zassenhaus algorithm

$f \in \mathbb{F}_q[T]$  が  $j$  次既約多項式の積のとき、 $f$  を因数分解する。

$f = f_1 \cdots f_l$  ( $f_k$  は既約) とする。中国剰余定理より  $\mathbb{F}_q[T]/(f) \cong \mathbb{F}_q[T]/(f_1) \times \cdots \times \mathbb{F}_q[T]/(f_l)$  なので、 $r \in \mathbb{F}_q[T]/(f)$  を一様ランダムにとるとその  $\mathbb{F}_q[T]/(f_k)$  ( $k = 1, \dots, l$ ) での像は独立に一様ランダムに分布する。

$p = 2$  のとき、 $\text{tr}_{(\mathbb{F}_{2^e}/(f_k))/\mathbb{F}_2}(r) = r + r^2 + r^4 + \cdots + r^{2^{e-1}} \in \mathbb{F}_2$  は確率  $\frac{1}{2}$  ずつで  $0, 1$  になる (恒等  $0$  ではない線型写像なので)。

$p \neq 2$  のとき、 $r^{(q^e-1)/2} \in \{0, \pm 1\}$  は  $f_k \mid r$  のときのみ  $0$ 、確率  $\frac{(q^e-1)/2}{q^e}$  ずつで  $\pm 1$  になる (有限体  $\mathbb{F}_q[T]/(f_k)$  の乗法群が巡回群だから)。

よって  $\text{tr}_{(\mathbb{F}_{2^e}/(f_k))/\mathbb{F}_2}(r)$  あるいは  $r^{(q^e-1)/2} - 1$  と  $f$  の gcd をとれば  $f_1, \dots, f_l$  のうち半分ほどが入る。

(TODO: ちゃんと解析する)

## 5 連立合同式

$t \equiv B \pmod{M}$  かつ  $at \equiv b \pmod{m}$  なる  $t$  を求める。 $t = B + Mz$  として、 $aMz \equiv b - aB \pmod{m}$  が条件。 $g = \gcd(aM, m)$  において、 $g \nmid b - aB$  なら解なし。そうでないとき、 $x \equiv \left(\frac{aM}{g}\right)^{-1} \pmod{\frac{m}{g}}$  とし (互除法で  $aMx + my = g$  なる  $(x, y)$  も求まっている)、 $z \equiv x \frac{b - aB}{g} \pmod{\frac{m}{g}}$ 。  $t$  は  $\bmod \frac{Mm}{g}$  で一意。

## 6 Montgomery reduction

正の奇数  $M$  に対し、 $M < 2^k$  として、 $M' \equiv -M^{-1} \pmod{2^k}$  をとっておく。

整数  $a$  に対し、 $2^{-k}a \equiv \frac{a + (aM' \bmod 2^k)M}{2^k}$  である (分子が  $\equiv 0 \pmod{2^k}$  かつ  $\equiv a \pmod{M}$  なので)。  $0 \leq a < 2^k M$  なら右辺は  $0$  以上  $2M$  未満。

$\bmod M$  で加減乗をたくさん行うとき、 $f(a) = 2^k a \bmod M$  で変換してから行う。 $f(ab) \equiv 2^{-k} f(a) f(b) \pmod{M}$ 。  $2$  幕以外での除算は  $f$  の適用時のみになる。

## 7 多項式除算

除算  $e(t) = f(t)q(t) + r(t)$  ( $\deg e = m, \deg f = n, m \geq n, \deg q = m - n, \deg r < n$ ) の両辺を  $t^m$  で割って  $T = t^{-1}$  とすると,  $E(T) = F(T)Q(T) + T^{m-n+1}R(T)$ . ここで  $E, F, Q, R$  はそれぞれ  $e, f, q, r$  を係数逆順にした多項式 ( $r$  は  $n$  項まで 0 埋め).

$f$  が monic なら  $F(0) \neq 0$  なので  $F(T)F'(T) \equiv 1 \pmod{T^{m-n+1}}$  なる  $F'$  がとれて,  $Q(T) = E(T)F'(T) \pmod{T^{m-n+1}}$  として  $Q$  が求まる.

$\text{mod } f(t)$  を常にとりながら加減乗を行うとき, 被除数は次数  $2n - 2$  以下なので,  $F'$  は  $\text{mod } T^{n-1}$  で 1 回求めておけばよい.  $F'$  は  $F'(T) = 1$  から  $F' \mapsto F'(2 - FF')$  を  $\lceil \log_2(n - 1) \rceil$  回繰り返せば求まる.  $O(n(\log n)^2)$  時間だが, FFT の配列の長さをちゃんとやると  $O(n \log n)$  時間にできる.